

国際日本学がめざすもの..
その多面性と可能性

廣川和花氏（専修大学准教授）

「明治期日本の梅毒と地域社会—診療記録を素材に—」

日本近代史の中で、梅毒はもっぱら売買春制度との関係において注目されてきた。しかし梅毒は、当時の社会においてきわめてありふれた病であり、決して娼妓やその客だけが罹患する特殊な病ではなかった。たとえば梅毒の進行によって起こる精神障害は「進行麻痺」と呼ばれ、長らく日本の精神疾患の一角を占め続けた。本報告では、明治期に栃木県塩谷郡喜連川において、遊郭の検梅と地域医療を同時に担った喜連川病院の医療記録を素材に、地域社会における梅毒の様相を考察したい。



松沢裕作氏（慶応義塾大学准教授）

「養蚕の導入と村の変化 —武蔵国大里郡大麻生村の堤外耕地の事例—」



本報告では、武蔵国大里郡大麻生村（現在の埼玉県熊谷市内）の堤外耕地（堤防と河流のあいだに所在する耕地）について、村がその管理にそのようなかかわったかを中心に検討する。幕末開港期に蚕種・蚕糸が輸出品となると、堤外耕地は培桑の適地として新たな用途が生まれ、これまでの耕地に対する村のかかわり方が、監視に関わる村外の賤民身分組織との関係も含めて変化する。この点を、村の定めた議定書を中心に紹介したい。

ポーター・ジョン（本学講師）

「近世身分制解体期における家畜伝染病と斃獣処理」



本報告では、東京都公文書館所蔵の「順立帳」を主な材料として、身分制解体期における斃牛馬処理の実態を解明する。明治四年六月よりシベリア海岸での家畜伝染病が蔓延し、国内での流行を未然に防ぐため、東京府内で斃獣の焼捨処分が命じられた。同年六月に設置された役の臨時負担体制のもと、賤民組織の構成員はその実務の担い手として位置付けられた。病獣焼却御用の歴史的背景と実施過程を分析することによって、斃牛馬処理の実現を支えた関係構造を具体的に把握する。

12月14日(金)

会場：東京外国語大学

研究講義棟 101 教室

時間：17:45～19:15

一般公開／入場無料／予約不要

世界の中の
日本地域史研究